

で3行に 「東京田端西臺通公三丁六三四番地 海国少年社

振替東京二八二五六番」、わきに「海野厚一」と自署がある。

青木の小学生の弟にあげてくれと「私共の雑誌——まだまだほんのつまらぬものだが画だけでも見て欲しい」という送り状である。

厚一関係の同誌現存資料の最初のものである(5-4)に次の記事が見られる。

「主張『海国少年』は海国日本の年少の人々の脳裡に健全なる海事思想を啓発、普及すると共に剛健なる気風と円満なる趣味とを涵養するを以て主義とす

海国少年社・海野厚一

編集部・海野順風・富士川海人・賢木原羊耳・樺島勝一

諏訪景是」

この年は、厚関係の資料は極めて乏しく、9月以降は皆無であるほどだが、末弟春樹の回想によると、この年の7、8月と推定されるが、その当時の静岡市東小学校で、ある期間ひらかれた何かの催しものの会場で、海国少年のPR活動をしたようだ。会場の入口にテーブルを置き、



背後に海国少年社の赤い大きな社旗をかかげて、入場客にパンフレット様のものと、社旗を模した3×3センチ位のピンのついた小

海国少年社・社旗と末

弟晴樹氏(8月)

旗(帽子や襟の飾り)を兄と共に配ったと言う。1日だけでなく2、3日やったようだ。上掲の写真は、その帰郷滞在中、家の裏庭にあったバラ畠の塀にその社旗をとめ、末弟に敬礼をさせた図。

前述のように、この年は資料が乏しく、曲水誌にも俳句作品の見当らぬのは、この年と12年である。試みに、同誌掲載の約300句を年別に整理すると、

| | |
|--------|------|
| 大正 5 年 | 28句 |
| ” 6 年 | 103句 |
| ” 7 年 | 89句 |
| ” 8 年 | 19句 |
| ” 9 年 | 0句 |
| ” 10年 | 12句 |
| ” 11年 | 33句 |
| ” 12年 | 1句 |
| ” 13年 | 16句 |

となり、11年から13年にかけては童謡シリーズの発行や「令女界」の少女詩、「曲水」所載の小品や随筆など資料的にも豊富であつて、厚の創作活動が質量共にもっとも充実した時期ともいえるわけだが、その中心の12年に俳句の発表がほとんどないというのは、俳句そのもの、あるいは他の創作との関係を考える上で興味のあることだといえるだろう。したがって9年についても同様に考えてよいわけで、既述のように、「海国少年」への傾斜が大正8年春頃からはじまり10年夏のはっきりした挫折まで、厚は、この年を中心に、6月号復刊にはじまり、少年向作品の創作と、編集、経営に身心をすりへらすほどに打ちこんだと思われる。残念なことにその事を示す資料である雑誌「海国少年」は、10年4月号から7月号までの4冊しか見るこ